



YAMAGA

近代の山鹿を
築いた人たち
シリーズ

007

熊本県茶業の大恩人（一八四五～一九二二）

中川正平

なか

がわ

しょう

へい

明治時代から大正にかけて、岳間茶の発展、振興に一生を捧げた実業家。

明治維新後、茶業による地域の発展を目指すため紅茶製法を学び、後に教師として、人材の育成も行った。

明治三十一年には、熊本市に製茶会社を設立し、自ら社長兼工場長となつて、紅茶や緑茶増産と質の向上に力を注いだ。

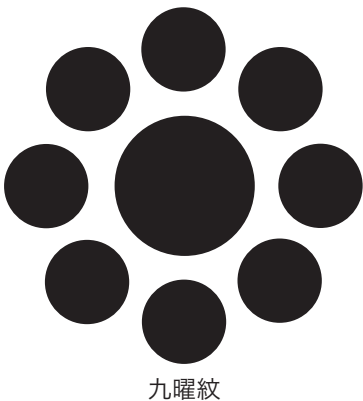
製茶の品評会にも度々出品し、明治二十一年の農産品評会で二等、明治二十八年の第四回内国勸業博覧会で三等など、受賞数は十数回にも上り、「熊本県茶業の大恩人」と称えられた。

輝かしい実績と伝統を誇る岳間茶

岳間茶は、古くは江戸時代の寛永年間（今から三七〇年以上前）に肥後藩のお殿様である細川藩主に飲まれるお茶として選ばれていた、歴史のあるお茶です。現在も山鹿市鹿北町岳間に広がる清らかな水と豊かな大地に育まれ、上品で風味豊かなお茶として多くの人に喜ばれています。また、全国茶品評会や熊本県茶品評会では数十回の農林水産大臣賞を受賞し、輝かしい実績と伝統を誇る山鹿市の名産品です。

岳間茶の歴史

お茶は、今と違って昔は大変貴重な飲み物で、江戸時代以前はお殿様や大商人などしか飲むことができませんでした。そのような時代から、岳間では自然に生えていた山茶を使って、良質なお茶を作っていました。『熊本県茶業史』によると、今から三七〇年以上前の江戸時代（寛永九年（一六三二））、当時の肥後藩のお殿様、細川忠利公が初めて藩内の各地を見てまわったとき、多久の星原番所^{ほしはらばんしよ}で出されたお茶を大変気に入られたので、その後「御前茶」として献上するようになったとあります。毎年新茶ができ上がると、細川家の家紋である「九曜紋」の入った茶壺に納め、椎持往還（※）を通して運ばれていました。ちなみにその茶壺は代々大切に守り伝えられていましたが、残念なことに明治



二年の大火で焼失してしまったそうです。

また古文書の資料としては、「宝暦十三年（一七六三）に岳間椎持に二町五畝十五歩（約二

ヘクタール）が存在していた」という記録が残っています。この資料が「県内最古の茶畑の記録」とされています。

このように岳間茶は県内でも古い伝統をもつお茶でした。

※椎持往還：江戸時代に整備された鹿北町椎持と熊本市をつなぐ道。現在はその大部分が県道三七号線で、道路として使われている。

正平、『経史』を学んで身を起こす

江戸時代の御前茶から、現在のような熊本県を代表する一大産地まで発展させた人物が、中川正平です。

正平は江戸時代後期の弘化二年（一八四五）、山鹿郡津留村（現在の山鹿市津留）で生まれました。家は決して裕福とは言えず厳しい生活を送っていましたが、勉強をおろそかにすることはありませんでした。正平は中国の書物『経史（※）』をよく読んでいたそうです。その中で「業を起す男子一生の志がなければ、生まれなかったのと同じである」という文に深く感動し、その後大きな志を持ち、人生を歩んでいくことになりました。

※「経史」：…中国の儒教の経典（教えを書いた書物）と歴史書のこと。経典はとくに易経・書経・詩経・礼記・春秋の五つを指し、歴史書は史記・漢書・後漢書の三つを指す。



鹿北茶発祥の記念碑

正平の青年期は時代の変換点

正平の青年期は、日本が大きく変わった時期でした。約三〇〇年間続いた江戸幕府を中心とした政治体制から、天皇を中心とした近代国家を目指す明治政府へと移り、国の政治の姿が大きく変わりました。明治政府は、国内で多くの産業を新しく始め、外国との貿易を進めて国を豊かにすることを考えていました。そのため、全国各地に新たな農産物や特産品を、より多く作ることが望ましいとして、勧めていきました。

その中でも特に力を入れていたのが、養蚕業と茶業でした。養蚕業は蚕を育てて採った絹糸をシルクの原料として輸出し、茶業は茶葉を加工して、緑茶だけではなく紅茶も外国に輸出しようと考えていたのです。

正平、茶業をおこす

正平はこの茶業に目をつけます。明治六年、震岳のふもとに約二ヘクタールもの広さの茶畑（熊本県内二番目に造られた、大規模な茶畑）を造り、製茶業を新たに始めました。まさに少年時代に感動した文のとおり「業を起こす男子」となったのです。

さらに明治八年、正平が三〇歳のとき山鹿郡多久村（現在の山鹿市鹿北町多久）に移り住み、古城エソさんと結婚しました。これ以後、この多久を中心として製茶業を盛んにすることに力を注いでいきます。

ちょうどその時、明治政府によって紅茶の製造を伝え教えるための施設（紅茶伝習所）が山鹿町（現在の山鹿市山鹿）に設置されました。これは日本で初めての施設でした。おそらく、製茶が盛んな山鹿の地が注目された結果、選ばれたのでしょう。伝習

所では、政府が雇った中国人教師二名の指導のもと、生徒二〇名で試作品が作られました。しかし、結果は好ましいものとは言えず、事実上失敗に終わりました。そしてすぐに伝習所は閉鎖されてしまいました。その三年後の明治十一年、今度は山鹿郡椎持（現在の山鹿市鹿北町椎持）に紅茶伝習所が作られました。

正平はこの生徒となり、紅茶製法を学びました。ここで学んだことを活かして、正平は紅茶の製造にも取り組むようになり、さらに後には自らも教師となって後に続く人たちの育成にも努めることとなりました。

このような熱心な活動は多くの人の関心呼び、茶業関係者のほか政府関係者などとの交友が生まれました。当時の農商務大臣であった大浦兼武（※1）や、農商務次官の前田正名（※2）からは、日本の茶業が目指すべき方向について、よく意見を聞かれたそうです。

※1 大浦兼武（おおうらかねたけ 一八五〇年（嘉永三年）ー一九一八年（大正七年））：明治・大正期にかけての官僚、政治家。鹿児島出身で、明治維新後は、内務大臣、農商務大臣、逓信大臣、警視總監、島根・山口・熊本・宮城県知事を務めた。

※2 前田正名（まえだ まさな 一八五〇年（嘉永三年）ー一九二一年（大正十年））：明治の官僚。宮崎県の開田事業や山梨県の甲州ぶどう普及などに力を尽くした。明治時代の産業を盛んにした実行者として知られている。阿寒湖周辺の森林を購入し保護を図るなど、自然保全にも貢献した。

新たな製茶法の導入と 技術者の育成に取り組む

紅茶製造の一方で、緑茶製造も力を抜くことはありませんでした。明治十四年、正平は静岡式緑茶製造法に注目し、熊本の製茶増産を図るため、自ら伝習所を建てて所長となり技術者の育成



青年期の中川正平

紅茶生産と輸出の拡大

を始めました。当時は宇治^{うじ}式の製茶製造法が主流だったのですが、正平はいち早く静岡式を導入して、製造の近代化を目指したのです。県内に広まったのは、これからずいぶん後なので、正平がいかに先を見越した工法を導入したかがうかがい知れます。

明治十年代から本格的に始まった熊本県の紅茶生産は、順調に生産高を増やし、明治十四年から明治二十一年の七年間で約三倍も増加しました。明治十五年にはイギリスにも輸出されるようになり、さらにロシアへの輸出も計画されました。熊本県では一層紅茶製造を盛んにし、買う人を増やすために、様々な工夫をしていきます。そこで追い風と見た正平は、紅茶の販売拡大に力を入れ、可徳^{かとく}乾^{けん}三^{ぞう}や大野徳行^{とくぎょう}などとともに熊本紅茶のPR活動のため

ちょっとコラム

●緑茶と紅茶

緑茶と紅茶は色も香りも味も違いますが、実は同じ茶葉から作られます。ではなぜこのような違いが生まれるのでしょうか？

それは作り方の違いからです。茶の葉の中には酸化酵素^{さんかこうそ}というものが含まれます。その酵素が空気に触れると茶色に変色して、味や香りも変わっていくのです。その性質を利用して作るのが紅茶で、変化させずに作るのが緑茶です。

紅茶を作るときは酵素が空気と触れやすくするために、生の茶葉をわざと揉みつぶして、ある一定温度で数時間寝かせます。そうしてよい香りと味が生まれます。一方緑茶は、生の茶葉をすぐ釜炒^{かまい}りします。熱を受けると、酵素^{こうそ}の働きがなくなるからです。その結果、みなさんが知っているようなさわやかな香りと味が出されます。ちなみに、日本では「お茶」といえば緑茶を思い浮かべる人が多いでしょうが、世界で「お茶」といえば紅茶です。紅茶は世界のお茶生産量のおよそ8割を占めているのです。



全国各地を回りました。ところが、宣伝が不足したこと、製品の質が安定できなかったためか、思ったほどの成果が得られず、販売額を増やすまでには至りませんでした。しかし、この活動のおかげで肥後紅茶の知名度が上がり、後に紅茶の品質が向上すると、県外からも多くの問い合わせが来るようになりました。努力は決して無駄にはならなかったのです。

明治三十一年、正平は可徳^{かとく}や大野らと一緒に、飽託^{ほうたく}郡

川尻町（現在の熊本市川尻町）に肥後製茶合資会社という製茶会社を設立し、自ら社長兼工場長となって、紅茶や磚茶（※）を作り販売しました。その業績は、彼らの努力の甲斐もあって、岳間工場を中心にして生産量を増やし、その年には約二千貫（約七・五トン）の紅茶や緑茶を生産しました。これらを海外にも輸出しようと考えた正平は、その年にロシアのウラジオストクまで出向き、約一ヶ月間製造方法の視察研究も兼ねて売り込みを行いました。正平のお茶にかける情熱と行動力には驚かされます。このような熱意の結果、ようやく熊本紅茶の海外輸出が本格化していきました。



※磚茶：紅茶あるいは緑茶を作る間に出る粉や、形の悪い葉（浮葉、下級紅茶、整枝葉）などを蒸して型に入れて固めたもの。

岳間茶のブランド名、県内外にとどろく

海外まで活動の場を広げた正平でしたが、地元岳間で活躍も衰えることはありませんでした。明治十七年には山鹿郡茶業組合が結成され、初代組合長に就任し、岳間茶を中心として山鹿全体の茶業が発展するよう力を尽くしました。

明治十年代から三十年代までは、茶摘みの頃は岳間に県内外から多くの労働者がやって来て、かなりのにぎわいを見せていま

した。県内は天草や益城、玉名などから、県外は八女や立花などの福岡県南部から、その数は総勢二千余人にものぼったそうです。『鹿北町誌』によれば、明治の頃は天草の人を雇わぬ人はなく、一軒に多いときには数十人が働いていたとあります。その天草の人たちが茶摘みに来たときに歌った歌が『茶山唄』です。こうして摘まれたお茶は神戸、横浜、長崎などの問屋で主に輸出用として取引され、この頃から「岳間茶」というブランドが県内外に広がったようです。

資料 鹿北茶山唄

のぼり（もどり）歌

一 茶山のぼりは 皆萱の笠 どれが姉や
ら妹やら
二 縁がないなら 茶山にござれ 縁は茶
の木の葉で結ぶ
三 去年みそめた 茶山の娘 今年しやお
るやらおらぬやら
四 茶山茶山と 茶の楽しめで来たりや
何の良かるか坂ばかり
五 茶山もどりは 五十刃の雪駄 さまに
履かせてわしや裸足
六 今年別れて また来年の 八十八夜のお
茶で会おう

つみ歌もみ歌

一 肥後の殿様 お召しの銘茶 茜櫛の手
もはずむ
二 声はすれども 姿は見えぬ 主は深山
のホトトギス
三 茶つみやしめゆる 茶つみ衆は帰る
後に残るはテボ円座



鹿北茶山唄（山鹿市指定無形文化財）

紅茶産業の衰退

明治三十七年、紅茶産業にとって大きな打撃となる事件が起こります。日露戦争が始まったのです。ようやくうまくいきかけた紅茶の輸出も、この戦争をきっかけとして一気に衰えることになってしまいます。取引先の国と戦うことになってしまっただけで、売れるはずありません。大きな取引相手を失ってしまい、新たな輸出先を探そうとしましたが、当時世界に急に広まりだした中国やインドの紅茶が安くて質も良かったので、太刀打ちできませんでした。日本の紅茶は行き場がなくなり、輸出も生産も次第に減っていききました。(※)

これまで紅茶の製造に一生懸命がんばってきた正平は相当ショックを受けたに違いありません。しかしそれに負けることはありませんでした。それからは緑茶を対象をしばって、その品質の向上に意欲を燃やしました。

※大正時代にはその生産はほぼ0になってしまっ。その後いったん復興の兆しが見えるが、昭和三十五年以降熊本県で紅茶は生産されなくなった。

四 お茶はもめもめ もみさえすれば どんなしば茶も香茶となる
五 お茶はもめたが 釜の上まだか 早くこきやけて もむがよい
六 お茶はもまんでも 時さえ来れば 栗飯だんごじゅりや腕まくり

仕上げ唄
一 揃た揃いました 箕先が揃った 秋の出穂よりやまだ揃た
二 紺の前掛け 松葉のちらし 待つに来んとは情けなや
三 お召し下さる 細川様に あげる誇りのこの銘茶
四 立ててくんはなり 伝習場の前に 女禁止の立て札ば
五 うたでやんなはり これくらいの仕事 仕事苦にして泣くよりも
六 飲んでみたかよ 鹿北のお茶が 味も香りも日本一

『鹿北町誌』より

数々の受賞歴

岳間茶の発展に力を尽くしたと言われる正平ですが、これは岳間茶の生産と品質の向上のために役立っただけでなく、その成果の確認のために、製茶の博覧会や共進会に進んで出品し、数々の賞を受けたことにもよります。

明治十八年および十九年の九州沖縄八県連合共進会(※1)にはいずれも六等に入賞、明治二十一年の農産品評会では二等を、明治二十八年の第四回内国勸業博覧会(※2)には三等を受賞するなど、その数は十数回にものぼります。このような数々の業績をたたえ、熊本県茶業組合連合会議所は明治三十四年、銀杯を贈って表彰しました。



左上が正平氏



晩年の正平氏（孫たちと一緒に）

さらに、大正九年当時の皇太子（後の昭和天皇）が熊本を訪問されたとき、正平が作った紅茶が出されたのですが、その紅茶は皇室に買い上げられることとなりました。熊本茶業を盛んにする目的もあったのでしようが、その風味に引かれたのかもしれない。いずれにせよ、皇室お買い上げの名誉は、正平にとって、これまで一生をかけてきた紅茶への努力が一気に報われた瞬間だったことでしょう。

※1 九州沖縄八県連合共進会：九州と沖縄の八県がさまざまな産業が发展することを目的に開かれた博覧会。各地の特産物や製品を集め、それらの優劣を比べた。明治十五年（一八八二）に長崎県で開催したのを始まりとして、その後各県で順々に開催された。

※2 内国勸業博覧会：国内の産業や技術の発展を目的とした博覧会。今後の日本にとって、長い期間にわたり中心となるもの（その技術や機械など）、または優れた技術を極めて作られた作品や製品などが出品された。国家プロジェクトと呼ぶにふさわしい、一大イベントだった。

熊本県茶業の大恩人

年を取ってからの正平は、もっぱら岳間を中心として最後まで製茶の品質向上と生産拡大への研究に明け暮れ、最期まで茶業が发展するように情熱を傾けました。

こうして、勉学に励み「業をおこす」という志をもった少年は、時代の大きな変化に流されることなく、数々の苦難を乗り越えながら、茶業を地域の一大産業まで育て上げ、七十六歳でこの世を去りました。大正十年三月二十七日のことでした。

その後、正平の死を惜しみ、彼の仕事をたたえるため、熊本県茶業組合連合会議所が発起人となつて県下関係者に寄付を募り、彼の墓の隣に記念碑が建てられました。そこには茶業組合の役員のほか、岳間の地で共にがんばった仲間たちの名前も記されています。

現在も、より一層岳間茶が发展することを願うように、鹿北町多久の宮地岳で正平のお墓が見守っています。



中川正平氏の墓



鹿北町多久に広がる茶畑

年表 History

弘化二年 (一八四五)	山鹿郡津留村(現：山鹿市津留)で誕生
明治六年 (一八七三)	震岳の一角に茶樹約二町歩(約二ヘクタール)を植える(※明治元年とする説もある)
明治八年 (一八七五)	山鹿郡多久村に移り、古城エソと結婚
明治十年 (一八七七)	西南戦争起こる。官軍への協力に政府から賛辞を受ける
明治十一年 (一八七八)	山鹿郡樺持村に紅茶伝習所が設立され、内務技師の村山鎮(むらやまぢん)から紅茶製法を教わる
明治十四年 (一八八二)	宇治の茶種一石五斗(約二七〇リットル)を購入して試植する
明治十七年 (一八八四)	山鹿郡茶業組合を設立 初代組合長に就任
明治十八年 (一八八五)	連合共進会で六等受賞
明治十九年 (一八八六)	連合共進会で六等受賞
明治二十年 (一八八八)	農産品評会で二等受賞
明治二十二年 (一八八九)	町村制の実施に伴い、多久村と樺持村が合併し、岳間村となる
明治二十二年 (一八八九)	岳間村の勸業会委員に選出される
明治二十七年 (一八九四)	連合共進会で六等受賞
明治二十八年 (一八九五)	第四回内国勸業博覧会で三等受賞 この頃、肥後製茶会社を設立し、社長に就任
明治三十年 (一八九七)	連合共進会で五等受賞
明治三十二年 (一九〇一)	紅茶などの販売拡張のため、ロシアのウラジオストックヘ渡り、一ヶ月間の視察、交渉を行う
明治三十四年 (一九〇二)	連合共進会で三等受賞
明治三十四年 (一九〇二)	熊本県茶業組合連合会議所が茶業発展の功績を称え、銀杯を授与
明治三十七年 (一九〇四)	日露戦争が起こる(一九〇五年)
明治四十四年 (一九一〇)	連合共進会で四等受賞
大正三年 (一九一四)	大正博覧会で銅牌受領
大正九年 (一九二〇)	皇太子殿下(後の昭和天皇)熊本行啓の際、中川正平が製した紅茶を供する。その後、皇室で紅茶をお買い上げになる
大正十年 (一九二二)	満七十六歳で永眠 その後、功績をたたえて墓碑が建立される

近代の山鹿を築いた人たち 007

熊本県茶業の大恩人 中川 正平

平成 21 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085(博物館内)
TEL 0968-43-1691

編集委員

黒田智亮(岩野小学校) 鮑本勝徳(学校教育課)
山口健剛(文化課)

参考文献・ご協力頂いた方(敬称略)

上田穰「中川正平伝」『肥後商工先達伝』熊商 60 周年記念

森川恒臣「中川正平ー城北百年の人物誌」熊本日日新聞(昭和 43 年 6 月 4 日)

『鹿北町誌』鹿北町

『熊本県茶業史』籠田勝著 第 35 回全国お茶祭り大会事務局

中川正和(山鹿市杉)

古賀寛了(山鹿市文化財保護委員)

森山良雄(山鹿市文化財保護委員)

高巢賢史(山鹿市文化財協力員)

石本邦昭(山鹿市文化財協力員)

中満晨子(山鹿市文化財協力員)